

日本看護歴史学会 會報

日本看護
歴史学会
第71号
2019年1月15日

年頭所感

日本看護歴史学会理事長 佐々木秀美



佐々木秀美 理事長

2019年、新たな年の始まりに際し、一言、ご挨拶申し上げます。今はまだ、平成ですが、4月、新しい天皇の即位と共に新しい年号がスタートします。歴史を辿れば、平成という文字には深い意味があるようです。内外共に平和であるという事は私たちの願いですが、この平成の時代にも思いがけない自然災害が起きました。次なる年号に思いを寄せますが、私たちの日常は、幸多かれと願いつつ、多事多難にも遭遇します。そうした時代に有って看護は何ができるのでしょうか？西洋の文明を受けつつ、慈悲深き東洋の一国家として歴史を刻んできた私たち日本国民一人一人が地域の中で、近隣との交流を成しながら特有な繋がりを通したケアリングがあるということも日本文化の歴史の一つとして忘れてはならないでしょう。私たち、看護専門職者は、そうした文化を継承しつつ、看護の本質探求を実践していく必要があります。

日本看護歴史学会（Japan Society of Nursing History）は、看護に関する歴史の新たな方向性と可能性を求め、広く看護歴史を考究することを目的としています。学術（Academic）の持つ意味を考えた場合、看護が学問であるかどうかの議論がなされた歴史的事実（Historical facts）も見逃せない問題でもありましょう。学術の中心である大学の教育目的は「広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させる

こと」であります。それは、ナイチンゲールが、「その知性（intellect）、倫理（moral activity）、実践（practice）において最上のもを患者に惜しみなく与える」看護師像とも一致しています。ナイチンゲールは、「看護師として訓練する教育において、その教育の主眼とするところは人格の問題であり、それは単に技術的な教育を施せば良いと言うものではありません」（Ever Yours Florence Nightingale Selected Letters,p426）と述べています。現在、圧倒的多数の病院附属の専門学校と平成に入って着実にその数を増やしてきた看護系大学が看護師になるための教育を施しています。

現実社会を見渡せば看護界で起きている問題は山積しています。歴史を振り返るのは人間の主体的な行為であり、各人の問題意識に従って課題が設定され、研究が実践されます。看護における歴史研究は科学的な実証研究であり、現地立に立ちながら過去を検証し、将来の展望を示唆することも可能となります。現実の持つ様々な局面を思想的に受け止め、その受け止めたものを自己の検討の対象とし、さらにあらゆる異論と突合せていくことが歴史研究であると考えます。制度には思想が反映されると申しますが、准看護師制度も含め、私たちの法律もその時代の個人・集団の思想が反映されてのことであり、現実にある社会の状況、文化的な慣習、風土によって影響されるということになり、それが制度に反映されたとも言えるのではないのでしょうか。

日本看護歴史学会会員の皆様におかれましては、それぞれのお立場で看護における課題発見とその解決の為の糸口として歴史研究に邁進され、その研究成果が日本看護歴史学会学術集会で花開きますことを祈念し、又、昨年度、呉市に設置されております本学に対しての支援に心より御礼申し上げます、年頭のご挨拶とさせていただきます。

日本看護歴史学会第32回学術集会を終えて

日本看護歴史学会第32回学術集会長 佐々木秀美
(広島文化学園大学看護学部・看護学研究科教授)

まず、率直に日本看護歴史学会第32回学術集会が無事に開催し終えることができほっとしています。主要テーマは「ナイチンゲール看護のこころ今に伝えるー看護・福祉思想と教育ー」であり、2018年8月24日(金)～25日(土)の2日間、広島文化学園大学看護学部 呉・阿賀キャンパスで開催しました。19世紀中庸、ナイチンゲールが創設した看護という仕事、地域の貧しい方々への看護職の地域貢献は、地域の方々が“健康”で幸せに暮らすためのいわゆる地域福祉貢献活動でありました。そこで、教育講演と会員の皆様の多様な歴史研究を通しまして、今日、問われております医療・福祉・教育の協働という言葉の“究理実践”に向けての検証・検討の機会とさせて頂きました。一般演題・交流セッション、4題の教育講演等、準備万端整え、参加登録もWEB登録とし、順調に時間が過ぎておりました。

ところが、7月6日・7日・8日と3日間降り続いた集中豪雨は、西日本に大きな災いをもたらしました。土砂崩れが方々で起き、道路の寸断や断水といった日常生活上の問題が生じ、開催が危ぶまれました。正に呉市は孤立状態となり、TV等の報道では、土砂災害現場や洪水の現場が連日のように報道されました。犠牲となって生命を奪われた方々は227人にも上り、大変な惨事となりました。開催までに1か月余りとなったころは中止も考えましたが、一部の道路が復旧し断水が解除となり、呉までのアクセスが確保されたことで開催という決断に至りました。私たちは、この災害で貴重な学びをしました。ナイチンゲールがクリミア戦争従軍中に述べた「健康維持に必要な不可欠な原則の欠如」という課題に直面したこともありました。主催者側は、会員の皆様の参加することが一つの支援の形という励ましに勇気が湧き、その温かさに感動もいたしました。

まず、学術集会開催にあたりまして、呉市長新原義明様、広島県看護協会会長 川本ひとみ様、広島文化学園大学理事長 森元弘志様からお祝

いのお言葉を頂戴しました。又、オープニングには広島文化学園大学学芸学部音楽学科の学生による演奏がありました。

第32回学術集会長である佐々木秀美の基調講演は、「ナイチンゲール看護のこころ今に伝えるー看護・福祉思想と教育ー」であり、続けて基調講演Ⅰでは、「看護の歴史パノラマから見えてくるものー看護史の古いスライド(ICRC作)を手がかりにー」というテーマで、新潟大学名誉教授の眞壁伍郎先生、教育講演Ⅱでは、「長谷川保の看護・福祉思想とその精神(こころ)の継承」を、社会福祉法人 十字の園理事長の平井章先生、教育講演Ⅲでは、「歴史と責任ー科学者・実践家は歴史にどう責任を取るかー」というテーマで、広島文化学園大学教授の小笠原道雄先生、教育講演Ⅳでは、「広島県における原爆医療の歴史の変遷」を、広島大学名誉教授であり広島県原爆被爆者援護事業団元理事長の鎌田七男先生にご講演いただきました。

理事会セッションは、「准看護師養成所における教育の現状ー調査報告ー」「戦争と看護ー被爆の記憶を風化させないために」「看護思想史ー19世紀以降の科学・哲学・世界思想と看護学ー」の3テーマが企画・運営・実施されました。会員の皆様からは53題の登録があり、当日は、1交流セッション、口演9題、示説37題の合計47題が発表されました。2日間の参加者数は、265名で各会場とも、活発な意見交換ができました。

懇親会には61名の方が参加されました。地元の中学生10名による「呉大和踊り」、広島文化学園大学法人職員の「テナーサックス」の演奏に励まされ、最後に全員で大きな円を作り、手を取り合っけきずなを深めました。ここで改めまして、学術集会の企画・運営委員及び当日、各会場におきまして、座長及び会場などのお役をお引き受け頂きました皆様に厚く御礼申し上げます。日本看護歴史学会第32回学術集会報告とさせていただきます。ありがとうございました。



佐々木秀美学術集会長の講演



広島文化学園大学理事長森元弘志様より
日本看護歴史学会へ感謝状



懇親会会場にて阿賀中学生による呉大和踊り



懇親会の最後は参加者全員で輪になり
気持ちを一つに

六史学会合同12月例会 一報告を終えて一

丸山マサ美（九州大学大学院医学研究院）

12月15日、六史学会（日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学会）合同月例会が順天堂大学にて開催され、97名が参加し盛会に幕を閉じました。演題は、以下6題「日本薬史学会『緒方洪庵の薬箱研究を可能にした大阪大学所蔵ケシ標本の意義（高橋京子先生）』、日本獣医史学会『鹿のプリオン病ー慢性消耗病（小野寺節先生）』、洋学史学会『歯の化石に対する本草学者と蘭学者の考察比較（松山知朋先生）』、日本医史学会『日本における屍体解剖の黎明期についてー社会文化的な視点からの再検討（Wolfgang Michel先生）』、日本看護歴史学会『アメリカ公文書館史料再考ー史料を活用したバイオエシックス教育の取り組みー（丸山）』でした。専門性に富む極めて学術的に質の高い演題が続く中、私は、



例会発表中の筆者

平成22年度より着手する『九州大学医学部史料研究（挑戦的萌芽研究：科学社会学・科学技術史）』成果（一部）を報告させていただきました。フロアから、さまざま角度の示唆に富む多くの質問を受けた事は、歴史研究の難しさと共に、今後さらに学際的研究の可能性を考究する意義ある経験となりました。

第33回日本看護歴史学会学術集会のご案内

高度実践時代に向けて看護と専門職のこれからを考える

会 期：2019年8月31日（土）・9月1日（日）
会 場：日本赤十字看護大学（東京都渋谷区）
会 長：川原由佳里（日本赤十字看護大学）



今日の日本では、少子高齢・低成長時代が到来し、急ピッチで保健医療福祉改革が進められています。地域包括ケア、医師の働き方改革、外国人労働者の導入に関する施策が次々と打ち出されるなかで、関連して看護にも特定行為研修と一部の医行為の実施、看護補助者への業務移行などの変容が迫られるようになりました。ここ数十年における日本の看護は高等教育化を成し遂げ、認定看護師や専門看護師などのキャリアを拓くなど、目覚ましいものがありますが、現在、あらためて看護職として将来どうあるべきかが問われる時代となったと考えます。

第33回学術集会のテーマは、『高度実践時代に向けて看護と専門職のこれからを考える』としました。日本では専門看護師が発足してから20年余ですが、米国では高度実践看護師のうち、専門看護師やナースプラクティショナーが発足してからすでに半世紀の歴史があります。この間、米国では次々につくられる関連職種、たとえば医師の補助者であるフィジシャンアシスタント（PA）、あるいは看護に関連のある補助者

との関係のなかで自らの役割を問い、人々の健康ニーズに応じるために大切にすべきアイデンティティを堅持するとともに裁量権を拡大すべく、立ち上がり闘ってきました。今あらためて、この間の歴史を振り返り、現在、ひいては未来に向けてどのような看護をめざすのか、ディスカッションをしてみたいと思います。

今回のプログラムでは、日米の高度実践看護の歴史を対比的に理解する企画として1日目には岡谷恵子先生（日本看護系大学協議会）、Julie Fairman先生（ペンシルバニア大学看護歴史研究者）をお招きし、ご講演いただく予定です。2日目のシンポジウムでは塚本容子先生（北海道医療大学）には米国でNPをされていた立場から、宇佐美しおり先生（熊本大学）には日本のCNSを牽引されてきた立場から、そして峯川浩子先生（常葉大学法学部）には米国の高度実践看護に関する立法過程を研究された立場から、日本の高度実践看護のこれからについて議論していただきたいと考えています。

一般演題の登録については、演題名の募集期間が2019年1月14日（月）～4月30日（火）、抄録の提出期間が2019年1月14日（月）～5月10日（金）です。会員交流の場としても、研究成果の発表の場としても、実り多い学術集会にしたいと企画委員一同知恵を寄せ集めています。どうぞみなさまご参加くださいますよう、心からお待ちしております。

プログラム（予定）

日時	プログラム
8月31日（土）	会長講演 歴史に見る看護の専門職化のプロセス －高度実践と役割拡大に焦点をあてて－ 講演 川原由佳里（日本赤十字看護大学） 座長 金井 一薫（徳島文理大学）
	教育講演 日本の高度実践看護の始まり、今、そしてこれから 講演 岡谷 恵子（日本看護系大学協議会） 座長 川嶋みどり（日本赤十字看護大学）
	昼食
	演題発表・理事会セッション他
	招聘講演 The Evolution and Future of Advanced Practice（仮） Julie A. Fairman, PhD, RN, FAAN, University of Pennsylvania 通訳 遠藤 花子（日本赤十字看護大学）
	総会 懇親会
9月1日（日）	シンポジウム 高度実践時代に向けて看護と専門職のこれからを考える 座長 田中 幸子（東京慈恵会医科大学）・春日 広美（東京医科大学） シンポジスト 塚本 容子（北海道医療大学） 峯川 浩子（常葉大学） 宇佐美しおり（熊本大学）
	演題発表・理事会セッション他

事前申込について

- 事前申込期間：2019年6月28日（金）まで。それ以降は当日受付となります。

申し込み方法	会員	非会員	学生(院生を除く)
事前参加登録	7,000円	8,000円	－
当日受付	8,000円	9,000円	500円

懇親会

参加費：4,000円（当日申込も可能）。学生（院生は除く）は当日学生証をご提示の上、受付にてお申込みと参加費のお支払いをお願いします。

- 事前申込方法：郵便振替

郵便振替口座 00170-9-515011

口座名義 第33回日本看護歴史学会学術集会

問い合わせ先 日本赤十字看護大学

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3 日本赤十字看護大学

日本看護歴史学会第33回学術集会 事務局

E-mail：33rdjsnh@redcross.ac.jp

「ファミリーヒストリー～SAM (TRF)」番組に協力して

鈴木 紀子 (佼成病院看護副部長)

私の学位(人文科学、国士舘大学)論文は、「陸軍看護制度の成立史」です。明治初期の陸軍軍医や衛生要員に関する育成・補充制度が研究対象です。昨年5月、日本医史学会を通して、NHKファミリーヒストリーから番組への協力依頼がありました。依頼内容は、軍医学校を出ていない民間の医師が、日清戦争に軍医として従軍できたのかという質問でした。

早速博士論文で資料とした『陸軍衛生制度史(明治編)』を調べ、陸軍では軍医不足対策として「陸軍衛生部現役士官補充条例」(勅令94号、1888年)を制定、その「特選の内規」により、民間の医師を「雇員」の軍医とする制度があったことを確認できました。さらに靖国神社内図書館「偕行文庫」に所蔵されている『明治二十七八年戦役陸軍衛生紀事摘要』で雇員の人数を調べ、これらの結果をディレクターに報告しました。

7月、私が順天堂大学医史学研究室にも所属

していることから、「順天堂大学日本医学教育歴史館」をお借りして撮影が行われました。インタビューに台本はありません。軍医長森林太郎(後の文豪森鷗外)の隊で、雇員として働いたことに関して意見を述べた部分が、10秒ぐらいでしょうか、映像で流されました(2018年11月26日)。多くの方から反響を頂きました。今回調べたことは、陸軍軍医の雇員制度として論文にまとめる予定です。



新入会員紹介(敬称略)

* () 内は会員番号 2018年6月～2018年12月入会

高橋登志枝 (18035)	永石喜代子 (18036)
平光 修 (18037)	塩谷 久子 (18038)
Supawadee Kruachottikul (18039)	
天野 勢子 (18040)	山崎麻由美 (18041)
佐藤 泰啓 (18042)	高安 玲子 (18043)
稲垣真梨奈 (18044)	高橋 朋子 (18045)

お知らせ

■事務局から

平成30年度会員動向(2018年12月末現在)

1. 会員数	339名
2. 入会者	45名
3. 退会者	4名

■投稿論文送付先

投稿論文送付先は、変更になっておりますのでご注意ください。

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学
日本看護歴史学会編集委員会
鷹野 朋実 宛

編集後記

2018年は過去の歴史の大きな節目と関連しています。150年前の1868年は明治維新、100年前の1918年には第一次世界大戦の終結。そして、70年前の1948年には保健婦助産婦看護婦法が公布され、50年前の1968年には保助看護法の改正で新カリキュラムが開始、公害病の認定やニッパチ闘争も始まります。この大きな歴史の中で自分史もあると気づかされた年末でした。

日本看護歴史学会会報 第71号

企画・編集 小田 正枝 (徳島文理大学大学院名誉教授)
三上 れつ (中部大学)
山崎 裕二 (日本赤十字看護大学)

発行責任者 加藤 重子 (事務局会報担当)

印刷 有限会社 新和印刷

事務局 〒737-0004
広島県呉市阿賀南2丁目10-3
広島文化学園大学看護学部内
加藤 重子/岡田 京子
TEL 0823-74-6000 (代表)
FAX 0823-74-5722
e-mail katoi@hbg.ac.jp

学会HP <http://plaza.umin.ac.jp/~jahsn/>